

注意の制御スタイルに文化が及ぼす影響—実験心理学的アプローチを用いて
Cultural effects on the control style of visual attention:
An experimental study

研究代表者 小宮 あすか (D1) 教員 楠見 孝
研究分担者 上田 祥行 (D2) 嶺本 和沙 (D1) 坂野 逸紀 (M2)
陳 蕾 (M1)

〔研究目的〕

注意の制御には2つのレベルが考えられる。視環境に対する視覚的注意などの知覚における低次レベルの注意制御と、思考・推論における高次レベルの注意制御である。これまでの比較文化研究では、主に高次レベルの注意制御に対する文化の影響が検討されてきており、その代表的なものとして、包括的注意—分析的注意が挙げられる (Masuda & Nisbett, 2001)。包括的注意とは、注意が集団全体に分散する注意の制御スタイルで、東アジア文化で優勢とされる。これに対して分析的注意とは、注意を個物に焦点化し背景情報を排除する注意の制御スタイルで、西洋文化で優勢とされる。これを検討した代表的な課題のひとつに、枠と線課題が挙げられる (Kitayama, Duffy, Kawamura & Larsen, 2003)。

この一方で、低次レベルの注意制御が文化によって異なることを検討した研究はきわめて少ないが、その1つとして、Ueda and Saiki (in prep) は、視覚探索課題の文化比較研究を行っている。この結果、アメリカ人はある程度の大きさの注意窓を用いて複数の刺激を一度で探索する注意制御スタイルをとるのに対し、日本人はそれよりも比較的小さな注意窓を用いて注意をすばやく動かしながら一度に一つずつ探索を行う注意制御スタイルをとる傾向がある可能性が示唆されている。

しかし、こうした低次レベルにおける注意制御の文化的差異と高次レベルにおける注意制御の文化的差異が、同じ注意制御スタイルに基づいたものかどうかについてはまだ検討されていない。本研究の目的は、低次レベルにおける注意制御スタイルの文化的差異が高次レベルにおける注意制御と同じメカニズムに基づいているのかどうかを検討することにある。

〔研究経過〕

この目的を達するために、本研究では個人差に着目した。比較文化の実験においては、日本人であってもアメリカ人と同様の結果を示す協力者や、逆にアメリカ人であっても日本人と同様の結果を示す協力者がいる。もし低次レベルの注意の文化的差異と高次レベルの注意の文化的差異が同じメカニズムによって生み出されているものならば、同じ個人がそれぞれの課題を遂行したとき、そのパフォーマンスが「文化的特徴を持つ程度」は課題を通して一貫しているはずであると考えられる。例えば、視覚探索課題を行ったときに日本的な振る舞いをした人は、枠と線課題を行ったときにもやはり日本的な振る舞いをするだろう。一方、もし低次-高次レベルの注意制御の文化的差異が異なるメカニズムに基づくならば、視覚探索課題時に日本的な振る舞いをした人が、枠と線課題においても同様に日本的な振る舞いをするとは限らない。すなわち、課題間で必ずしもそのパフォーマンスの「文化的特徴を持つ程度」は一貫していないだろうと予測できる。

そこで本研究では、低次レベルでの注意制御と関連している視覚探索課題 (Ueda & Saiki, in prep) の指標と高次レベルでの注意制御と関連している枠と線課題 (Kitayama et al., 2003) の指標、さらに遺伝子の影響を受けることが知られている空間的注意課題 (Parasuraman, Greenwood, Kumar, & Fossella, 2005) の3つの課題を同一の日本人協力者を対象に行い、その課題間の成績の関連性について検討した。

〔研究成果〕

本研究の結果、視覚探索課題において文化的差異が見られた指標と、空間的注意課題において遺伝子の発現と関連しているとされる指標とに関連があり、またこれらの傾向と枠と線課題の文化的差異が見られた指標との関連性が低いことが示された。このことから、高次レベルにおける注意制御スタイルの文化的差異と低次レベルにおける注意制御スタイルの文化的差異がそれぞれ異なるメカニズムに基づく可能性が示唆された。

本研究の成果は、日本心理学会第60回大会(札幌)にて一般研究発表として、また社会心理学会第49回大会(鹿児島)の自主企画ワークショップ「文化と認知研究の現在と今後の展望」において話題提供として発表された。また、今後、増田貴彦助教授(アルバータ大学)の協力を得てカナダ人のデータが収集される予定であり、現在文化比較研究としての準備が進められている。

本コロキウムには、研究分担者のほかに渡邊創太氏(京都大学文学研究科)が参加し、これにより、本コロキウムの参加者は、教育学研究科、人間・環境学研究科、文学研究科と3研究科4研究室にわたることになった。それぞれの視点から活発な意見交換がなされたことは本コロキウムの特色であると考えている。